

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

2016年12月22日
第5号
教育指導課教育課程係

児童生徒の多様な見方・考え方の育成を目指して

■ 仙台市立五橋中学校（授業研究）

■ 仙台市立南光台中学校（授業研究）

11月25日（金）、仙台市立五橋中学校（岡崎 徹 校長先生）を会場に、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業研究が行われました。高階 絵理先生がUnit 5「Living with Robots For or Against」を題材に3学年英語の授業を行いました。「ロボットとの共存は賛成か反対か」というディベート大会に向けて、グループごとにディベートの戦術を話し合うというものでした。

授業検討会では、教育センター大黒知行指導主事から英語科の「見方・考え方」に基づいた「深い学び」等について次のような指導助言がありました。

○「主体的な学び」のために、コミュニケーションを行う目的・状況等を明確にするとともに、学習の見通し・振り返りの場面を設けることが重要である。今回の授業では学習目標が明確で、学習の見通しが持てる状況であった。

○導入部分で、生徒全員が友人の質問や教師の答えを聴きながら、会話のつながりを考えた質問をしていた。他者との関わりを捉え、内容や関連性を整理し、目的や状況に応じて自分の考えを形成・整理するという外国語教育の「見方・考え方」を活用した活動になっていた。

○ディベートについては、国語科との横断的な取組につなげられる。



授業の様子

また、12月16日（金）には、仙台市立南光台中学校（遠藤 裕子 校長先生）において授業研究が行われました。西村 豪先生が「気体の発生と性質」を題材に1学年理科の授業を行いました。「気体の性質」についての知識を活用し、発生した気体が何であるか実験結果をとおして検証・考察させるものでした。西村先生は、授業において「主体的・対話的で深い学び」の実現に向け、次のような工夫を行いました。

○役割分担を明確にし、各実験に生徒が主体的に取り組むようにした。

○自然な形で対話が図れるように、話し合う場面を工夫した。

○3通りの方法から、同じ気体が発生した理由をグループで考えさせ、ホワイトボードにまとめ、全体に示すことにより、多様な考えを共有させ、自分と友人の考えを比較し、深めさせるようにした。



実験の様子

仙台市立広瀬中学校 数本 芳行校長先生から「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりについて、次のような指導助言をいただきました。

○発生した気体が、どのような根拠に基づいて二酸化酸素と結論付けたのかについて、グループごとにもっと時間を掛けて話し合わせることで、理科学習で身に付けた「見方・考え方」を働かせた「深い学び」につながる。

○教科全体、各単元あるいは各授業との関連を図りながら、教科の「見方・考え方」を計画的に身に付けさせ、「見方・考え方」による新たな課題の発見・解決、自己の考えの整理・形成など、「深い学び」の実現に努めなければならない。

また、最後に「生徒の『主体的・対話的で深い学び』を実現していくために、教師自らがアクティブ・ラーナーとなり、授業改善を進めていかなければならない。」との身の引き締まるお話をいただきました。

児童生徒の多様な見方・考え方の育成を目指して

■ 仙台市立八木山中学校（授業研究）

11月28日（月）、12月8日（木）の両日、仙台市立八木山中学校（境野 百合子 校長先生）を会場に、社会科と国語科の授業研究が行われました。

【11月28日の授業研究】

須藤 浩司先生が「地方自治と私たち」を題材に3学年社会の授業を行いました。単元をつらぬく課題として「仙台市の政治に参画するために自分たちにできることを考える」を設定し、生徒は、地方自治の仕組みや財政、地方公共団体が抱える課題を自分たちが住んでいる仙台市の現状や課題を考えるとともに、どのように政治に参加していくかを考えました。本時の授業では、自分が考えた仙台市の課題や現状と候補者の選挙公約を比較し、支持する候補者の応援演説を考えるというものでした。



授業の様子

仙台市立第二中学校 佐藤 邦宏校長先生から次のような指導助言をいただきました。

- 生徒が課題意識を持ち、課題を自分事として考えを深めることができた。
- 生徒自身が新聞や市政だよりで調べたことが学習活動に生かされ、単元構成の中で、生徒の疑問を授業に取り入れることができていた。
- この単元での社会科での「見方・考え方」を生徒に身に付けさせるために、振り返りシートに教師がコメントするなど、「主体的な学び」、「見方・考え方」を働かせた「深い学び」につなげることが必要である。
- 資質・能力の育成のために、各教科の「見方・考え方」を鍛えることが大切。そのことが「問い」を見出して解決したり（問題解決）、自己の考えを形成（創造）したりしていく「深い学び」を実現する。
- 「深い学び」に導くために、どのような問いや教材を準備し、いかに単元の構成を工夫していくかなど、試行錯誤しながら授業改善活動に取り組んでいくしかない。

【12月8日の授業研究】

小野寺 健志先生が「走れメロス」を題材に2学年国語の授業を行いました。登場人物の心情描写、表現、文章構成に着目し、人物の心情を読み取らせるとともに、作者の最後の7行に込められた工夫を考えていくというものでした。授業では、意図的な指名によって生徒に多くの考えを出させ、生徒は友達の考えをノートにメモし、自分の考えと違う部分や自分の考えに付け加えたい部分に赤線を引きました。そのことによって、生徒は自分の考えを再整理し、変容を自覚しながら、自分の考えを更に深めていくことができました。



授業の様子

教育センター 高橋彰吾指導主事から次のような指導助言がありました。

- 友人の発表を聴いた時に、明らかに表情が変わった生徒がいた。自分の考えとは異なる考えを聴き、アクティブに思考をしている様子が見られた。
- 意図的な指名によって、生徒から多様な考えを引き出した。自分の考えと異なる部分と参考にしたい部分を意識させることにより、生徒自身が自分の考えを深めることができた。
- 授業では、「なぜそのように考えたか」という根拠を表現、描写、段落構成に基づいて説明させていた。「見方・考え方」を働かせた学習を常に意識させ、「深い学び」の実現を図ろうとしていたことがよく分かった。
- 「対話的な学び」をグループでの話し合い活動と捉えがちだが、本時は、友人の発言をメモし、作者の意図を読み込むなど、文字による「対話的な学び」であった。
- 教科において、「見方・考え方」を働かせ、「深い学び」を実現することは大切である。また、「見方・考え方」を教科だけでなく、読書活動など、日常の様々な活動の中に生かすことで、更に身に付いていく。